筒井新聞　第 337 号（２）

# ネガ画像で映す人生の哀しみ

## １．『小泉八雲集』

この８月、しばらく病床で過ごす期間があり、その間、新潮文庫の『小泉八雲集』を読んだ。『怪談』の中の「耳なし芳一」や、『日本の面影』の中の「日本人の微笑」など、彼の代表的な物語や評論が網羅されていて、先にご報告した『雨月物語』[1]に続いて、しんみりした内面の哀しみを味わった。そして、Amazon Review に下記の感想を投稿した。

> 個人を支える高貴な魂
>
> 個人の内部に、自己を支える高貴な魂が宿っていることを指摘する多くの物語。それが、キリスト教信仰などの神との対峙によって自己を保持している精神態度とは違ったあり様を示していることを鮮明に示している。「日本人の微笑」ほか。神信仰が人間集団社会の構成原理確立を志向する方向へ発展するのにたいして、個人の内面の中でトラブルを処理してしまう方向は、心情的な美しさを感じさせるが、社会の不義・堕落を一向に改善する方向に行かないという点が気にならないこともない。小泉八雲が、日本人にも描けない観察と詩情をたたえて多くの日本の古典を蘇らせていることは貴重である。

これに対する、友人・佐藤和宏さんの感想は次のとおりであった。

> 特にサラリと触れられている「社会の不義堕落を一向に改善する方向に行かない 」云々は、文学と社会科学・因習と制度等の深淵を垣間見るような鋭い指摘だと思いました。
>
> 日本のような個の曖昧な村的な構成社会では、不条理や理不尽が既成事実として前提になってしまっている。むしろ批判や改善に向かえない心情の発露として極めて情念的な『怪談』の世界が成立しているように思います。
>
> 冥界を巡るダンテの『神曲』は社会批判を伏線とした物語。江戸時代に一世を風靡した鶴屋南北の『東海道四谷怪談』は忠臣蔵の裏話で、封建制身分制批判をふまえながらも、結局は内面的な情念物語(因果応報・怨みつらみ)に帰結してしまう。閉ざされているんですね、この国は。

---

[1] 「『雨月物語』が映し出す現世」『筒井新聞』第 336 号（３）
http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/336/336-3.pdf

民間伝承の怪談奇譚の類いはさらに泥臭いものだったはずですが、外国から漂着した感性豊な青年ラフカディオ・ハーンによって洗練されピュアな″蓮の花″のように美しい物語として昇華したように思います。欧州の強欲な合理主義・個人主義からはみ出したハーンにしてみれば、曖昧模糊とした、それでいて奇妙に物静かでウェットな日本の人々・その風土はパラダイスにも思えたことでしょう。惚れ込んだ者の目には相手の悪いところは見えない、ハーン・小泉八雲は幸せだったに違いありません。

確かに、小泉八雲の感性とそれを訳した上田和夫の文章とは美しく、これはこれで、明治 23 年にやってきたコスモポリタンの小泉八雲という稀有な感性と明治以前の文化が色濃く人々をとらえている社会の、幸運な一瞬の出会いが凝縮した、稀に見る情緒と彩りの世界であり、病床での忍耐の時間を忘れさせるにはありがたい慰めであった。

## 2．虚無が支配する安倍レジーム

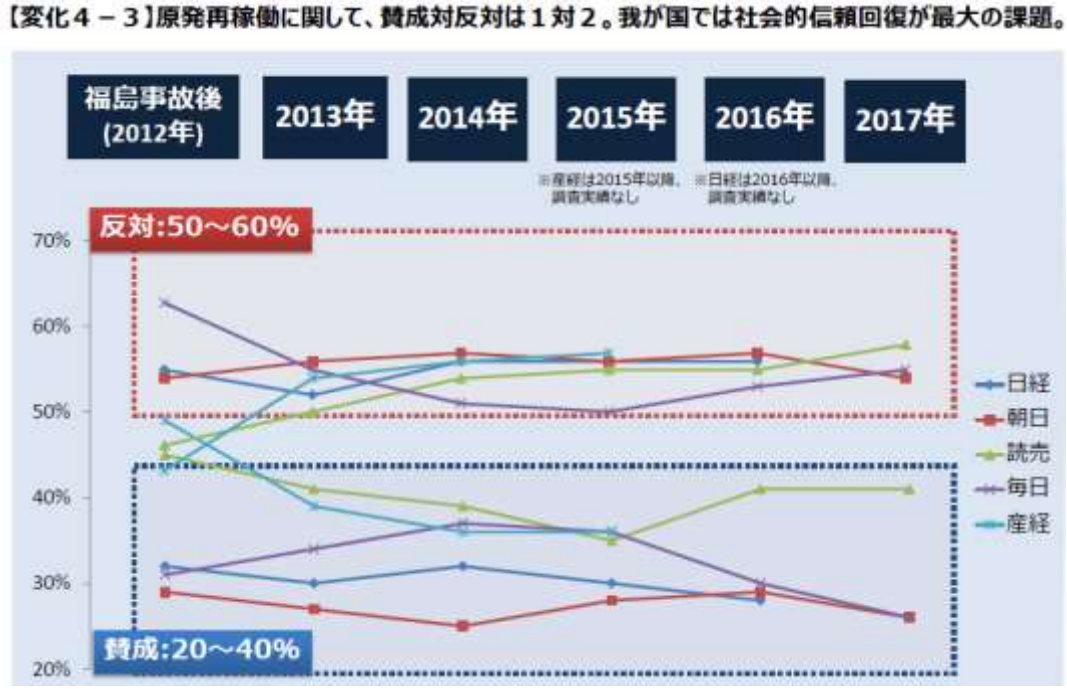
2011 年の福島原発事故以来、原発の性格を技術的側面と社会的側面の双方から考えてきた。そして一先ず昨年秋に『原発は終わった』という本を出版させていただいた。つまり、技術的にも社会的にも原発を推進しなければならないという理屈は一つもない、という結論が明確に確信できたからである。

しかも、そのことは私一人の信念ではなく、どの新聞社の世論調査でも、反対は 50～60%、賛成は 30%内外である（図１）。

けれども、そのことが、現実の政策選択に反映されない。問題は原発だけではない。昨年来明らかになったように、森友・加計問題のように、首相夫妻が友人関係に基づく依怙贔屓をして、国有地売却に 8 億円の値引きをしたとか、首相のアメリカ留学時代の学友に依怙贔屓して特例的な学校開設を認可したとかという事実が明らかになっても、官僚機構が挙げてその不正を実現化し、証拠隠滅のために文書改竄をしたりという腐敗がはびこっているのに、一般選挙民は「ほかの内閣よりよさそうだから」という理由で政権交代を求めない。しかも、安倍政権は天皇やアメリカの権威に盲従することによって、事柄を正当化している。

つまり、権力者は虚偽を語ることが日常化し、市民たちはその事実を知りながら誰もそれを問題視していない構造になっている。大ぴらに虚偽が語られることによって、表の世界は「虚無主義」に支配されている。同じ冥界巡りの物語でも、ダンテのものはこの世の実在の人物を地獄に落としてみたりして、現世変革のエネルギーを発散している。他方、『雨月物語』や『怪談』などは、深夜に現れる幻影であって、夜明けとともに幻影は消えてしまう。

図 1.　原発再稼働に関する全国紙 5 紙の世論調査結果[2]




３．虚無の中の虚栄と残酷

福島原発事故は、当初福島県内だけでも 16 万 4865 人が避難し（2012 年 5 月）、今も県外避難者数 33,517 人（2018 年 7 月 12 日）[3]、県内への避難者数 10,836 人（2018 年 7 月 31 日）[4]である。これらの人びとに対して、年間 20mSv の被ばく環境の所へ帰還可能として、家賃補償を打ち切るなどの被害者切り捨て政策を推進している。そして、復興庁は 2021 年 3 月 31 日までに廃止するというスケジュールだけは決定している。

他方でオリンピックのキャンペーンはマスコミを総動員して、すべての国民が大歓迎しているかのように煽っていて、被災者の存在を視野から消そうとしてるように見える。

この虚無の中に社会を分断し、葬り去ろうとする力と戦う戦略とエネルギーを構築しなければならない。

（2018 年 8 月 26 日　　哲）

---

[2] 出典：資源エネルギー庁資料「エネルギー情勢を巡る状況変化」（平成 29 年 8 月 30 日）16 頁
http://www.enecho.meti.go.jp/committee/studygroup/ene_situation/001/pdf/001_005.pdf

[3] 「福島県から県外への避難状況」福島県
http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/282028.pdf

[4] 「県内への避難状況」福島県、ｐ.6
http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/life/368883_902313_misc.pdf